

中川米造先生との出会いと 日本保健医療行動科学会の歩み

宗像恒次*

先生との出会いまで

「健康と病気の行動科学」という題名がつけられた濃紺とワインレッドカバーの学会年報第1巻がここにある。巻末をみれば設立発起人として国内や海外のそうそうたる研究者が名をつらね、中川先生やマーガレット・ロックさんをはじめ当時が偲ばれるとても勢いのある論文が掲載されている。この年報は1986年に発行されている。その年は本学会が発足した年であるが、それら設立発起人による発足記念シンポジウムは中川米造・南裕子・河野友信・稲岡文昭・山本和郎・宗像恒次をシンポジストとして1985年10月に挙行されている。

ここまでするには中川米造先生との出会いまでを少し回顧せねばならない。私の20歳代のショックを語ることになる。1973年に大学院を修了し、当時日本看護協会調査研究部に勤務し、「病院の医療サービスの事例研究」をするため都内の最も主要な病院に調査に入った。病棟で診療記録・看護記録をみると、多くの場合、患者さんがそれまでに外来や退院を繰り返した記録が載っている。「なぜ病気になるような患者のライフスタイルを変える支援をし、病気の再発や悪化を予防できなかったのか。これでは死ぬまでただ病気を繰り返し、重症化しているのをただ対症療法して待っているだけではないか。最高の病院といってもこれでは野戦病院ではないか。病院が単なるコンクリートのかたまりで

*筑波大学教授

は切ない]。このような24歳の若さゆえのナイーブなショックを今だに忘れはしない。その後12年間のUCLA病院への留学や欧米の病院見学や米国の医学教育の実態調査を進めるなかで、日本の医療サービスや医療教育の貧困を確信することとなった。

あるとき、米国人医師に行動科学なしに米国の医療臨床はないと言われたとき、私自身も米国医療サービスの実態調査をしていてそのとおりだと思った。1970年代当時、行動科学はすでに医師や看護婦の教育カリキュラムや資格試験のなかにも完全に定着していたのである。私は日本でこれからどうしたらいいのだろうと自問し、焦った。既存の学会のなかではちががあかないだろう。創るしかないと思った。当時は、中川先生とはシンポジウムで2度お会いしただけで個人的な付き合いがまったくなかった。でもこの新しい学会の指導者にはわが国には中川米造先生しかいないと直感していた。そう直感したら、その日先生の自宅まで追いかけて電話をしていた。先生は「僕はあまり会長というのは向かないと思うが、いいよ」と言ってくださった。これで希望が出てきた。前述のシンポジストの方々のみならず、相磯富士雄氏、園田恭一氏、中島紀恵子氏、波平恵美子氏、長谷川浩氏、D. メカニック氏、A. クライマン氏、H. フリーマン氏、C. レスリー氏、J. ストークル氏をはじめ、私たちの知り合いの多くの研究者の賛同を得て発起人となっていただき学会発足となったのである。

学会発足から13年の発展

大会テーマや年報の特集を振り返ると、保健医療・QOL・セルフケア・ソーシャルサポートネットワーク・ヘルスプロモーション・食行動・コミュニケーション戦略・つくりかえる環境・慢性病・ノーマライゼーション・パフォーマンス・自己決定・セルフヘルプ、そして、本年のターミナルケアまで13年を経過してきた。この13年間の歩みは大きく2つの時期に分けられる。第1期[理念導入期]は保健医療界にまず行動科学というタームやパラダイムを知ってもらうための時期である。今や看護教育のカリキュラムのなかでは保健医療行動

論・保健行動論・保健医療行動科学などという教科目は当たり前のよう存在し、また医学教育のなかでも医療行動科学・行動科学・健康科学・医学概論などの教科目で教えるところが増加してきている。行動科学という名前が知られるようになったのは本学会の活動によるところも大きいと思う。が、まだ実践や臨床活動への応用や浸透が十分でないところから設立10周年目を迎え、第II期〔実践技法導入期〕に入り、1994年から小集団技法・認知行動療法・音楽療法・絵画法・サイコドラマ・アサーショントレーニング・気功・箱庭療法・ヘルスカウンセリング法・ゲシュタルト療法・瞑想法・内観療法・交流分析・自律訓練法・エンカウンターなど行動科学領域の様々な実践技法について参加者に体験学習を兼ねたプレゼンテーションが本格的に始動してきている。これはかつてWHO行動科学セミナーに参加して以来、ワークショップを進めてこられた中川先生にとって本領を発揮するものである。こうした支援のための実践技法の開発や教育訓練は現在も盛んに続いているが、かなり定着したものになってきたといえる。1993年には中川先生に顧問になっていただき、ヘルスカウンセリング学会（現在約1800名会員）が発足し、行動科学に基づくヘルスカウンセリング法などの実践学習が年間1500名を超える参加者を得て行われている。また中川先生がかなり以前から医学生や医師を対象にコミュニケーション技法や面接技法の体験学習をされており、それが浸透し、模擬患者による研修として定着してきている。藤崎和彦さんというよき後継者を得てさらに発展を続けている。保健医療の行動科学研究も若手を中心に健康・医療心理学、医療人類学、健康・医療社会学、臨床経済学などの分野における原著が多く発表されるようになってきている。

このように中川米造氏の指導と庇護のもと、わが国でもこのような学会が発展してきたことを誇りに思うとともに、本誌を借りて先生の偉大な貢献に深く感謝を申し上げたい。私たちは今後、行動科学が保健医療福祉実践のなかにあたりまえのように定着し、人々の健康と幸福のために確実な貢献ができるよう、理論的・技術的な向上のために教育研究をさらに進めるとともに、1人の実践者として研鑽を続けることを誓おうと思う。